

平成25年度成果報告書

I. 業務の内容

1. 業務の題目

課題研究「科学リテラシーの向上に関する実践的研究」

2. 担当フェロー

星 元紀

3. 当該年度における成果

①国民の科学リテラシーの向上に関する調査・研究

a. プロジェクトの総合推進

・科学リテラシーならびに国民の科学リテラシーの向上を考えるために、平成24年度に続き研究打合せ会及び勉強会を継続的に実施した。特に、福島第一原子力発電所事故後、国民の科学者に対する信頼が著しく低下したと言われていることに鑑み、事故調査に関わられた方々を中心に、事故後の科学コミュニケーションがどう展開したか、国民の科学リテラシーのレベルがどう反映したかなどに関する考察を深めた。

b. 国民の科学リテラシーの向上に関する調査・研究

・「21世紀の科学技術リテラシー像～豊かに生きるための智～プロジェクト」報告書（2008, 科学技術振興調整費「科学技術の智プロジェクト」）の内容を広く普及させるための具体案を策定するために、各共同研究者が背景とする多様な観点（異文化コミュニケーション、生活リスク、科学教育、教育行政、科学コミュニケーション）からリテラシーに関する調査・研究を行うとともに、以下の諸点に関する我が国の特徴を中心にさらなる調査・研究を行った。

i) 科学情報の受け止め方

ii) コミュニケーションの仕方

iii) リスクに対する考え方と反応の仕方

iv) i)～iii)との関わりからみた初等中等教育の内容、手法

c. リテラシー研究打合せ会等の実施

・下に示すように、13回の研究打合せ会、勉強会を実施した。

第12回 唐木英明氏「食品の安全とリスクコミュニケーション」（平成25年4月1日）

第13回 小泉周フェロー「脳科学の伝え方・伝わり方」（4月15日）

第14回 コンピテンシーとリテラシー等（5月20日）

第15回 科学コミュニケーションと科学リテラシー等（6月3日）

第16回 板倉聖宣氏「学ぶに値すること」（7月1日）

第17回 平川秀幸フェロー「これからの科学技術コミュニケーション 安全・安心科学技術及び社会連携推進委員会での議論を踏まえて」（7月22日）

黒川清 「Uncertain Times: Quo Vadis」

第18回 北澤宏一氏「福島事故を拡大させたもの—組織的な隠蔽を防ぐ新たな法律」（8月29日）

第19回 中間報告書の構造（9月2日）

第20回 Ayelet Baram-Tsabari氏 “Identifying Public Interest in Science Using Aggregated Search Data”（9月19日）

第21回 科学・技術と民主主義、日本の特徴、SCJレポートの問題点（10月3日）

第22回 日本の価値観とコミュニケーション等（11月1日）

第23回 文理融合等（11月27日）

第 24 回 OECD 調査、日本は何を目指すのか（12 月 13 日）

第 25 回 中間報告書原稿の検討（平成 26 年 3 月 28 日）

②調査結果とりまとめ

- ・これまでの成果をもとに、ユニットとしての中間報告書を平成 25 年の夏までにまとめ、所内の検討に付するために、共同研究者全員とともに分担執筆中である。